

1月  
2024年

162号

地域共創・未来共創の大学へ

広  沖縄大学 **報**  
OKINAWA UNIVERSITY

発行

沖縄大学経営企画室  
〒902-8521 沖縄県那覇市字国場555  
☎ 098(832) 2910  
<http://www.okinawa-u.ac.jp>

現役合格者数過去最多!  
沖縄県教員採用試験

現役  
24名  
合格!



## CONTENTS

- |                              |                        |
|------------------------------|------------------------|
| 02 年頭あいさつ「佐喜真 實 理事長／山代 寛 学長」 | 09 研究のひろば／わがゼミナール      |
| 03 卒業生の活躍を紹介！あの人はいま          | 10 沖大の魅力に迫る 沖大散策vol.11 |
| 04 第64回 沖大祭                  | 12 沖縄県教員採用試験合格者        |
| 06 News & Topics             |                        |



## 年頭あいさつ

 OKIDAI VISION 地域がキャンパス、地域のキャンパス  
 2028 沖縄大学は「知」と「人」の交流拠点となります

 沖縄大学 理事長  
 佐喜真 實

明けましておめでとうございます。

昨年は四年ぶりに、各種対面での行事が復活し、新型コロナ禍から解放されたと実感した年でした。

今年、辰年はさらなる飛躍の年としたいですが、社会・経済の状況は必ずしも良くありません。大学運営の環境にも厳しいものがあります。また学校法人にとっては、来年四月の改正私学法の施行に向けて、組織体制変革のための整備を行う重要な年ですので、悠長に構えてはおれない年になりそうです。こういう時は、「悲観は禁物、為すべきことをなして楽観せよ」の心境で、課題をひとつひとつこなししていきたいと思います。

ところで今回の私学法改正は私立大学の経営基盤を大きく変える重要な改正です。改正は、理事長、理事会への権限集中による法人運営の不備を防止することを主眼としており、牽制役である評議員会の権限が強化されています。そのため、評議員会が正しく機能するためのメンバー構成も重要ですが、理事会と評議員会が建設的な協働と相互牽制ができる体制づくりが必要ですので、本学もその準備をしています。

もう一つ重要な改革は教育デジタル化の推進です。本学も ICT を活用できる環境整備をこれまでマルチメディア教育研究センターを中心に順次行い成果も挙げてきました。ただ、今後は教育における DX を推進する一方で、経営陣による IT マネジメント強化が要請されており、これに応えるために、来る四月に情報システム管理室を設置します。大学においては、図書館などの各部局が独自にコンピュータシステムを導入して活用していますが、今回設置の管理室は、各部局の運営サポートと情報システムの健全性を保つためのシステム管理を行っていく予定です。また、システム監査への対応も想定しています。これらが進めば、教学・事務局システム運営のトータル管理体制が構築できることになります。

本学は、これからも時代の要請に違わず時機に叶った改革を行うことで、沖縄県そして那覇市に立地する存在感のある大学づくりに邁進したいと存じます。本年も宜しくお願ひ申し上げます。

新年あけましておめでとうございます。

昨年は、新型コロナ感染症が5類に移行、WHO が緊急事態の終了を宣言し、報告される感染者数が激減するなど、長く続いたパンデミックが収束化し、キャンパスに賑わいが戻った年になりました。在学生や保護者、教職員、後援会、同窓会、そして地域の皆様には、様々な形のご支援、ご協力をいただき、コロナ禍を乗り越えることができましたことに対して、心から感謝の気持ちをお伝えいたします。

昨年は沖縄大学の第五次中期計画の総括の年でした。この第五次中期計画は大学の10年後の姿を見据えた長期ビジョン「OKIDAI VISION 2028」を実現するため、2019年4月から5年間の計画として策定されたものです。「OKIDAI VISION 2028」は、「地域共創・未来共創の大学へ」という理念に基づいて、教育、研究、社会貢献の3つの将来像と、新たな共創に挑戦する将来像を示すものとして、沖縄大学の創立60周年を機に策定されました。沖縄大学のウェブサイトでも公開されていますので、ぜひご覧ください。

沖縄大学は、このビジョンを実現するために、第五次中期計画のもと、コロナ禍の困難の中にあっても、「地域がキャンパス、地域のキャンパス」となることを目指し、教職員一同で取り組み、成果を上げてまいりました。第五次中期計画のなかで、新たな共創への挑戦として、健康栄養学部新設、経法商学部への学部名称変更などにより、大学に新しい風が吹き、カジマヤー（風車）をモチーフとした新たなロゴマークの制定はコロナ禍に立ち向かう挑戦のシンボルとなりました。

今年は第五次中期計画を引き継ぎ、2028年に向けての第六次中期計画のスタートの年です。私立学校をめぐる経営環境は、近年の少子化等の影響もあり今後、厳しさを増していくことが予想されていますが、沖縄大学は、地域と共に沖縄の未来を創る大学として、教育、研究、社会貢献に邁進し、新たな共創に挑戦してまいります。皆様のご支援とご協力をよろしくお願い申し上げます。本年も沖縄大学をどうぞよろしくお願ひいたします。


 沖縄大学 学長  
 山代 寛



## 卒業生の活躍を紹介!

## あの人はいま



大城 信博さん

## Q お仕事やカンボジアのことおしえてください。

2019年からカンボジアを拠点にしています。カンボジアはアジアの中では比較的治安がよく、高級マンションやホテルにはジムが併設されています。はじめはコンドミニアム等の施設にボクシングトレーナーとして出張し、レッスンを担当していました。新型コロナウイルス感染症の影響等も受けましたが、私のレッスンを受けたいという固定客もついてきたことから、思い切って自分のジムを持つと思いグループレッスンができるジムへと拡大したところ。カンボジアはキックボクシングが主流なのですが、パンチボクササイズを教えています。現在は40人のレッスン生を抱えるほどになりました。英語も苦手でしたがスポーツはボディランゲージで伝わります。

## Q 高校時代、大学時代について

私は中学校の頃不登校でした。片親のため家庭環境も進学を考えられる状況ではありませんでした。自信もなく、学校に行っても無意味に感じていたのですが中学校の先生や高校の先生が進学を進めてくれたことや、中学からボクシングとの関わりがあって、大人の方との出会いが大学まで導いてくれましたね。不登校だったり留年だったり少し遠回りはしましたが、高校時代はボクシングを頑張っていたので一度国体選手にも選出され、少しずつこんな自分でも、努力すれば変わるかもしれないと、ひたむきになる事の大事さに気づいていきました。高校の先生から言われた「大学は修行のつもりで行ってこい!努力したらその分、必ずなにか形は変わるかもしれないけど返ってくる。多くの人と出会って4年間がんばれ!」という言葉が背中を後押ししてくれました。

ですが、まだまだ自信を持つことができなかつたこともあり、大学に入ってから周りの人とのコミュニケーションに悩みました。気さくに声をかけてくれた同級生にちゃんと言葉を返せず不愛想

卒業生の活躍を紹介する企画「あの人はいま」。

今回は2008年に福祉文化学科に入学、卒業後プロボクサーになり、現在はカンボジアでジム経営をしている大城信博さんを紹介します。



に感じさせてしまって、その度に後悔を感じていました。でも、大学4年生のときにこのままじゃいけないと決意して、どう思われてもいいからと自分から挨拶するようにして、コミュニケーションを図っていった結果、少しずつ打ち解けていき、やっと大学生らしさのある学校生活を体験することができたように思います。ありきたりな話ですが自分が変われば周りも変わっていくということを実感した瞬間でした。楽しすぎた4年生、良い時間が沖縄大学で過ごせました。

あまりに楽しすぎたので、この瞬間を残しておきたいとそれ以降は日記をつけています。関わってきた人達の言葉や出来事を書いて、時々読み返し、その時の感情を思い出すことでまた力をもらえている感じです。

## Q 大学卒業後について

ボクシングのプロテストを卒業前に受け、プロの道へ進みました。でも今考えると覚悟が足りていない状態でプロの道に進んだので、結果を出そうと必死ではあったのですがプロの厳しい世界の中では、やはり悲観的なメンタルが出てしまって、考えがマイナスになっていって、悪循環に陥り、ボクシングを引退することにしました。

ただ、全日本トーナメントで西日本の決勝に行けたり、その時に判定で負けた選手が次の全日本決勝に進みそのまま優勝したりと、もう少し頑張ればという結果は残すことはできていました。

そして就職した先でカンボジア支社に行くことになりました。IT関連の会社で、沖縄支社からカンボジアへと渡ったのですが、元ボクサーという事でボクシングを教えてほしいという声が増えていき、気づけば休みの日にはボクシング教室を開くようになっていました。そこでトレーナーという道が見えてきて、再びボクシングをトレーナーという形で再開してみようと思立ち、起業、独立しました。

## Q 今後の目標は

現在のジム経営の発展もそうですが、周りの協力もあり、来年はプロボクサーとして復帰することになりました。今年2月で35歳になるので最後の挑戦なんです。35歳までがプロとして復帰できる期限なので。

チャンピオンを目標にし、まずは日本ランキング入りを目指したいです。

年齢のことやカンボジアという環境で十分な練習はできるのか、という声はありますが、それでも自分の可能性を狭めず、挑戦することを決めました。

これまで出会った方への感謝の気持ちがあるので、カンボジアという土地にこだわりたいです。カンボジアを拠点に今後もがんばります!

## Q 在学生へメッセージ

学業も大切ですが、これから何かにチャレンジしたい、成長したいと、道を進もうとする時に決断を迫られることがあると思います。その時の環境や周りの批判に惑わされず、自分で考え、決断すれば、最終的な結果に納得できるものです。良い結果も、そうじゃなかったとしても、自分で決めたことなら納得できる。後悔することも待っているかもしれないけど、それでも自分を信じて挑戦してみよう。

やるならひたむきに。取り組む気持ちや姿勢は周りに必ず伝わります。

自分自身もそうなるように頑張りますので、皆さんも一緒に頑張りましょう!

## 大城さんの恩師、山代寛学長からのコメント

大城信博さんは2011年度の私のゼミ生でした。プロボクサーを目指してトレーニングしながら学業も頑張っていたのを思い出します。今回、10年ぶりに再会し、このインタビューにも臨席させていただきました。4年次には、「このままじゃ卒業できないよ!どうするの?」とか、「本当にプロボクサーとしてやっていけるの?そんなに甘くないと思うよ」とか、プレッシャーをかけました。しかしきちんと学業を修めて卒業、その後もSNSなどでプロとしての活躍やカンボジアに行ったことなど、消息を知っていましたが、このインタビューでは、自分で考え自分で決断し困難を乗り越えていく彼の生き様を詳しく知ることができました。後輩たちにも伝えることを願っています。カンボジアでの活躍もなかなかのものですが、プロボクサーの復帰という新たな挑戦を始める彼にエールを送ります。





10月28日(土)・29日(日)、第64回沖大祭を開催しました。4年ぶりとなるコロナ禍以前の規模での学園祭、多くの方にご来場いただき、盛況のうちに幕を閉じました。実行委員メンバーはもちろん、出店した学生さんや先生方、ステージを盛り上げてくれたゲストの方々、多くの方の想いが繋がりとても楽しい2日間となりました。その様子を写真で紹介します！

桃原海人実行委員長の開会のあいさつでスタートした沖大祭！  
FECの芸人のみなさんに盛り上げていただきました！！



# 沖大祭

第64回  
大盛況で幕閉！  
想いをもつ



学長もゲームに挑戦！



実行委員メンバーが正門前で  
おてむかえ！



ベトナムからの留学生 TRINH  
THI MINH THUさんの演奏



りゅうぎん紅型デザイン  
コンテストで大賞受賞の  
赤嶺耕平さん初の作品展も開催



管理栄養学科の学生たちは、  
手軽に貧血検査や  
身体測定ができる健康チェック  
ブースを開設！  
家族で来場いただいた方たちで  
大盛況でした。







FECの看板舞台「お笑い米軍基地」は初めての野外開催となり、多くのファンが詰めかけて、たくさんの笑顔が会場にあふれていました。司会担当凸凹トラベリングをはじめ、まーちゃん(小波津正光)は、最初から最後まで舞台を盛り上げてくれました！出演アーティストの皆様、本当にありがとうございました！



実行委員のメンバーはステージ進行をはじめ、会場を盛り上げようと一生懸命で、とても頑張っていました。新型コロナウイルスの影響で、大規模な学園祭が開催できておらず、実行委員メンバーも手探りで活動だったようですが、みんなの頑張りが素敵なお祭りを作り上げました。来場者に楽しんでほしいという想いが伝わる学園祭でした。

## 沖大祭を終えて

沖大祭副実行委員長 屋良 美樹 (国際コミュニケーション学科 2年 / 糸満高校出身)

私は高校時代、一度も文化祭を経験できなかった事が心残りでした。沖縄大学に入学し、学校のイベントに携わりたいという想いから、実行委員の活動を始めました。

今年度はようやくコロナの制限なく開催できる運びとなり、実行委員会では『学生が主体』となる学園祭をモットーに話し合いを重ねました。特に、学生から作品応募を募ったフォト・アート展覧会や、普段の通学コーディネートを披露するファッションショーは、学生が輝く機会にしたいという想いのもとに企画しました。また、SNSを活用した出店団体やステージ出演者募集の呼びかけにも力を入れました。

沖大祭当日は、お化け屋敷に大行列ができたり、飲食出店が次々と完売したりと、どの出店も大盛況でした。さらに、お笑い米軍基地(FEC)さん、エイトマンさん、D-51さん、DIAMANTESさんの4組のゲスト出演ステージは、それぞれのプログラムに多くの観客が集まり、会場が笑顔と感動で溢れていました。弾き語りやダンス、吹奏楽などの、学生によるパフォーマンスは、調理中の出店団体をも魅了する素敵なステージでした。

両日とも準備期間の不安や心配を忘れるほどに賑わい、何よりも多くの学生がキラキラして楽しんでいる様子がみられ、心から嬉しかったです。

今年度の実行委員会は1~4年生の約30名が所属していますが、大規模な学園祭は全員にとって初めてとなる経験でした。そのため、企画準備の段階から教職員の方々をはじめ、ステージ業者さんや関係者の皆様にご意見をいただき、たくさんお世話になりました。常に私達を温かくサポートして下さった全ての方々に感謝しています。また、実行委員メンバーとは、準備期間の多忙な時間ともにしたことで、よりみんなのことが好きになりました。今回の沖大祭で得たたくさんの思い出や反省を大事にしながら、来年度の開催に生かしたいです。



閉会のあいさつをする  
屋良さん



# News & Topics

## 2023 10/17 「アカデミックインターンシップ」を実施しました！



沖縄大学では初の試みとなる「アカデミックインターンシップ」が行われ、小禄高校1年生7人が大学の1日を体験しました。

「アカデミックインターンシップ」は、これまでのオープンキャンパスや大学見学会とは異なり、大学での実体験をととして高校で身に付けておくべき「学びに対する意欲や姿勢」を養うことを目的とし、県外では教育委員会等が企画し大学が受け入れを行っている取り組みです。今回、小禄高校進路指導部の萬木ちあき先生からの依頼を受け、本学では初めて開催することとなりました。

国際コミュニケーション学科4年次の本村杏珠さんが生徒たちのエスコート役を務め、学内の施設見学からはじまり、2限目には教職履修生が受講する科目「教育相談の理論と方法」講義を受講するなど、こども文化学科3年次の講義にも参加しました。

体験した生徒たちは「90分の講義はきついのではないかなと思っていたのですが、時間が経つのがあっという間でした」や「大学生たちは話しやすく、大学って楽しいところだなんて感じました」、「いろいろな話が聞けて、大学進学について考える機会になりました」と感想を話してくれました。

## 2023 10/19 『観光業の魅力について学ぶ』国際コミュニケーション学科合同ゼミ

那覇商工会議所が主催のセミナーが本学で開催され、国際コミュニケーション学科天久大輔先生、末吉綾乃先生、渡邊ゆきこ先生のゼミ生(3・4年次)が参加し、観光業の魅力について学びを深めました。

「将来の沖縄観光を担う人づくり」をテーマに、全国通訳案内士として活躍している宗像愛さん(株式会社ツーデザイナーズ代表取締役)をお招きして開催されたセミナーでは、アドベンチャーツーリズムについてや沖縄観光の課題と魅力について、またインバウンド対応のポイントについて講演されました。観光を手段として地域経済へどう貢献できるか、学生たちも学びを深めたようでした。



## 2023 8/22 りゅうぎん紅型デザインコンテスト 大賞受賞 赤嶺耕平さん(経法商学科)

第32回りゅうぎん紅型デザインコンテストにおいて、経法商学科1年次の赤嶺耕平さんが見事大賞を受賞しました。

46作品の中から大賞を受賞した赤嶺さんの作品は、「美ら海へ探検 新たな発見を求めて!」と題し、紅型のまだ見たことのないデザインを求めて、紅型の可能性に自らの探求心を大きな海でデザインしたそうで、白地を基調とした、凛とした強さのなかに色鮮やかなデザインが目を引きま

審査員の先生からも、白地が素敵で技術がすばらしいと講評をいただきました。高校2年生から紅型デザインに取り組み、第30回のコンテストでは技術賞を受賞したこともある赤嶺さんは「今回は大賞を受賞でき、うれしい」と喜びを語っていました。



## 2023 8/28 男子バスケットボール部 報道ステーションに出演！

2023年夏に開催されたバスケワールドカップ。

沖縄大学体育館でテレビ朝日報道ステーションの中継が行われ、松岡修造さん、馬瓜エブリンさんと一緒に、男子バスケットボール部が番組出演をしました。解説コーナーで学生たちが日本代表の河村勇輝選手やホーキンソン選手の役を務め、番組を盛り上げました。



## 2023 10/16 福祉文化学科 問題発見演習 「卒業生とキャリアの話をしよう」

福祉文化学科では、卒業生の体験談を聞く機会を得て、大学に入学して一年目の学生たちが大学生活や卒業後の進路をより具体的にイメージして、新たな夢や目標を持つきっかけになればと毎年開催しています。今回は社会福祉専攻卒業生の新城琴乃さん(社会福祉士・八重瀬町社会福祉協議会勤務・2022年3月卒業)と健康スポーツ福祉専攻卒業生の川満優成さん(中学・高校の保健体育教員免許取得・児童指導員としてレジリエンススポーツセンター勤務・2017年3月卒業)に、大学時代のことや資格取得に励んだこと、また現在のお仕事内容についてお話をいただきました。





## News &amp; Topics

2023

## 11/20~24 全国大会ベスト8! 軟式野球部



第46回全日本大学軟式野球選手権大会(11月20日~24日)が開催され、本学軟式野球部はベスト8の好成績を収めました。

玉城祥梧監督は、「日頃の練習から、考えてプレーするよう心掛けている。来年度は、考える野球に磨きを掛けて全国制覇を目指して頑張りたい」と次年度を見据えた意気込みを語りました。

## 試合結果

準々決勝	桃山学院教育大学	2対6
2回戦	金沢学院大学	13対10
1回戦	八戸工業大学	13対0 5回コールド勝ち

2023

12/1 師走の名物イベント  
2023年度チャンプルーフェスタ開催

今年度は9つの個人や団体が参戦。英語や韓国語、中国語等を用いて、歌・ダンス・寸劇などを披露しました。練習を重ねこの日を迎えた参加者の熱いパフォーマンスに会場も大いに盛り上がり、楽しいひとときを過ごしていました。

審査の結果は以下の通りです。

- 1位: 岩崎日向大さん(中国語朗読・「愚公移山」)  
 2位: ホンユンシンのアイドル(韓国語ダンス・少女時代「Gee」)  
 3位: 狩俣怜佳さん(英語歌・「There's nothing holdin' me back」)  
 観客賞: 洪ゼミ(英・中国・韓国語を使って寸劇・「チャンプルー 桃太郎」)



2023

10/26 2023年度  
冠奨学金奨学生証書授与式を開催

冠奨学金とは、学生の経済的な修学環境を改善し学業を奨励することにより、将来、地域社会で活躍し得る人材を育成し還元することを目的とした奨学金です。この奨学金の原資は、本趣旨に賛同いただいた企業や団体または個人からの寄附金によるもので、寄附者の名前を冠した奨学金として、学業優秀で課外活動や研究活動等の分野においても活躍している学生に与えられます。授与式には、寄附を頂いた8企業1団体を招き、奨学生に選ばれた20名の学生に奨学生証書が授与されました。



2023

## 11/11 「eスポGOMI with 琉球コラソン in 沖縄大学」開催!

「eスポGOMI」は、制限時間内に集めたごみの重量と種類でポイントを競う「eスポGOMI」と、ゲームを競技として楽しむ「eスポーツ」を掛け合わせたイベントです。

スポーツを通じた地域振興と地域に根付いたチーム作りを目指す琉球コラソンとスポーツの価値を通じた地域貢献と社会課題解決を目指す福祉文化学科健康スポーツ福祉専攻のビジョンが合致して実現しました。

eスポGOMIの運営には、eスポGOMI開催委員会(日本スポGOMI連盟/株式会社Life Reversal Gaming./横濱OneMM)にご協力いただきました。

沖大で開催された「eスポGOMI」では、ごみ拾いの競技時間を前半30分と後半30分に分け、ハーフタイムに「ぶよぶよeスポーツ」を実施。参加学生20名が8チームに分かれて対戦したeスポーツでは、チームメンバーへの声援や勝ったチームの歓声で盛り上がりました!



2023

11/20 「全国障害者スポーツ大会」金メダル  
兼村・津曲選手が学長表彰

山代寛学長に金メダルの報告を行ったのは、ボッチャ選手として出場した兼村星哉さん(福祉文化学科社会福祉専攻1年次)、チームスタッフとして帯同した津曲颯斗さん(福祉文化学科健康スポーツ福祉専攻2年次)、福祉文化学科准教授の中山健二郎先生の3名です。兼村さんと津曲さんは10月末に鹿児島で開催された「全国障害者スポーツ大会」に出場し、ボッチャ競技で見事金メダルを獲得しました。ボッチャ競技を初めて約2年の兼村さんは、ボッチャは頭脳ゲームでとても面白く奥深い競技だと競技の魅力話し、是非来年度も県代表として出場し、金メダルを狙いたいと抱負を語ってくれました。



左から中山健二郎先生、津曲颯斗さん、兼村星哉さん、山代寛学長



# News & Topics

## 2023 12/8 地域の課題を調査研究！ 第23回経法商学会ゼミナール大会開催

今回で23回目となるゼミナール大会は10のゼミ(基礎演習・専門演習)が参加し、子どもの貧困やヤングケアラー等沖縄の抱える課題をはじめ、同世代が関心を持つ身近なテーマに着目しアンケート調査や関係機関への聞き取り調査をまとめ発表していました。中には、国際通りでよく見かける企業Tシャツを着ている観光客について、なぜ着ているのかをアンケート調査したゼミもありました。



- 1位：豊川ゼミ(基礎演習Ⅱ)「なぜ、観光客はオリオンビールTシャツを着ているのか？」
- 2位：豊川ゼミ(基礎演習Ⅱ)「沖縄の大学生における旅行の動機について」
- 3位：富山ゼミ(基礎演習Ⅱ)「少年法の厳罰化について」
- 特別賞：富山ゼミ(専門演習b)「京アニ事件と有責性」



## 2023 12/3 『第1回沖縄県高大連携中国語発表会』 岩崎日向大さんが2位入賞！

『第1回沖縄県高大連携中国語発表会』が琉球大学で開催され、国際コミュニケーション学科1年次の岩崎日向大さんが2位(初級部門)に入賞しました。

今回は「初級部門」、「中級部門」、「朗読部門」、「スピーチ部門」と4つの部門に分かれて開催された発表会、本学からは1年次の3名が「初級部門」に出場しました。岩崎さんは完璧な発音が評価され、見事2位入賞しました。



左から王志英先生、上運天美鈴さん、岩崎日向大さん、新垣静乃さん

## 2023 12/5 『障がいへの理解を深める絵本の読み聞かせ』吉村ゼミ(こども文化学科)

こども文化学科吉村壮明先生のゼミ生が、はごろも小学校(宜野湾市)で読み聞かせ活動を行いました。

吉村ゼミ(現3年次)では、障がいへの理解を深める活動として『ぼくのおとうとは機械の鼻』という医療的ケア児の絵本を県内の小学校へ配布する活動をスタートさせます。絵本の内容に感銘を受けたゼミ生が、県内の小学生に広く周知できればと、絵本を求め、北海道の出版社に問い合わせたところ、学生たちの想いに賛同してくださった出版社より、販売できない(日焼けや折れ等)絵本を約45冊、吉村ゼミに寄贈いただき、絵本の配布活動を行うこととなりました。これまでにインターシップ先や教育実習予定校へ寄贈していますが、この日は、学生が住む地域の小学校で読み聞かせ活動を行いました。6年1組、2組、3組・4組合同クラスにゼミ生2〜3名一組で読み聞かせを行い、絵本を寄贈しました。

短い読み聞かせの時間でしたが、学生たちの一生懸命な読み聞かせや障がいについて偏見をなくして理解を深めてほしいという想いに、児童たちは真剣に耳を傾けていました。



## 2023年10月より正門横バイク置き場が拡張されました。



大学駐車場には限りがありますので可能な限り、バス等の公共交通機関を利用ください。



# 研究のひろば

## 楽しい翻訳の世界

「I am a student」をどうやって翻訳しますか。「私は学生です」だけでなく、「俺は学生だ」「私は学生!」「学生だよ」と一つの文を翻訳するにも数えきれないぐらいの可能性あります。私は、主に言語教育で翻訳をどう活用できるかの実践研究をしています。言語教育における翻訳というと、文法訳読法のイメージが強く、話す力が身に着かないと敬遠されることもあります。ただ、コミュニケーション力を伸ばすための翻訳、言語の楽しさを知るための翻訳など、翻訳には様々な可能性があります。実践研究では、特定の言語教育理論に基づいた授業を実施し、データを収集して学習成果を多角的に分析します。私の場合は、翻訳の授業を実施し、授業の録音や、授業前後のタスク、授業後のインタビューなどをもとに、どのような学びが生じたか、学生がどのような力が伸ばせたかを詳細に観察しています。さらに、実践結果をもとに理論の課題も洗い出すことで、広く言語教育に還元することを目指し

ています。データが膨大になるので、データの整理や分析が大変ですが、自分の主観ではなく、ある程度客観的な視点で、学習成果を観察できるのが実践研究の魅力です。また、研究を通して、今まで気づけなかった学生の考えに触れられるのが個人的には楽しいです。

昨年度に沖縄に来たばかりで、沖縄ではまだデータ収集をしていないですが、将来的には沖縄大学でも実践研究ができればと思っています。沖縄大学の学生も、日本語の共通語、ウチナーヤマトゥグチ、英語など様々な言語資源を持っています。また、沖縄に来てから、沖縄と一口にいても、地域によって言語表現が多様で、県内の言語の豊かさを実感しました。さらに、家庭で複数の言語を使っている学生や、本土の高校に通ったり、本土出身だったり国内外の移動を重ねている学生もいます。沖縄大学の学生が、自分の言語資源を大切にしながら、充実した人生を送れるために、どう翻訳を活用していけるかも考えたいと思っています。

経法商学科 准教授  
行木 瑛子



## 教員を目指して

こども文化学科 教授 宮里 晋

私は昨年度まで公立小学校で勤務をしており、今年度4月から初めて大学という職場で働くことになりました。そのため、まだ1年間を通して大学の取り組みや行事等の様子を把握しているわけではないため、私自身発見と学びの日々が続いています。そんな中、私が担当しているゼミは、人文学部こども文化学科の専門演習a b(3年生)と専門演習c d(4年生)です。ゼミに所属している学生は、皆さん小学校教員を目指しているため、学校現場で働くことになった際に実践・活用できるような内容や教師としての心構え、資質・能力を意識して活動しています。3年生前期では教材開発力やプレゼンテーション能力を意識した取り組みをしました。「沖縄の世界遺産」に視点を当て、各自が分担して世界遺産を調べ、プレゼンテーションを作成して報告会を行い、その中から実際に1カ所を選んで現場視察にも行きました。今年度は識名園を視察したのですが、担当した学生がまるでプロのガイドさんのように細かい点まで丁寧に説明をしてくれましたので、とても充実した学びとなりました。後期においては、こども文化学科のイベント「沖大小中学校」という活動に早くから取り組みました。子どもたちが喜びそうな教材を学生の皆さんで探だし、検討してアレンジを加え、近隣の学童にお邪魔して授業実践に取り組みました。事前の教材作成

や模擬授業で何度も集まり、みんなで協力して作り上げた授業は子どもたちに変な喜び、大きな成果をあげることができました。4年生においては、7月の教員採用1次試験が控えている前期の間は常にピリピリと張り詰めた空気が漂っていました。そんな空気を感じつつ目指す教師像を話し合ったり、テーマを決めてディベートに取り組みんだり、子どもたちと楽しめるレクリエーションを考えたりすることで、教育現場で生かせる実践を少しずつ学んでいきました。採用試験が終了した後期は、卒業論文の完成に向けて全力を挙げています。もう一つ、今年度の4年生は沖大祭でかき氷と沖縄そばの店にも取り組みました。久しぶりの本格実施ということや、大学生生活最後ということもあり、皆さん頑張っている思い出を作ることができました。



沖大小中学校(3年次ゼミ)



沖大祭(4年次ゼミ)





# 沖大の**魅力**に迫る 沖大散策 vol.11

沖縄大学キャンパスには貴重な美術品等が数多くあります。様々な人の思いが込められた作品について、広報誌では定期的に紹介しています。

今回は、**大学キャンパスの建築デザイン**についてです。1985年に竣工した1号館に始まり、その後、2号館、3号館、本館と沖縄大学のキャンパス建築の設計を担当してこられた**建築家・真喜志好一さん**と大学キャンパスを歩きながら、設計当時のお考えや思い等、お話を伺いました。

(長年、キャンパスアメニティ委員を務めている小野啓子教授にも同行いただきました)



真喜志 好一さん

小野 啓子 教授

## 1984年に着工した現在の1号館の設計で大切にしたこと

大学の理念である『地域に根ざし、地域に学び、地域と共に生きる開かれた大学』、これを当時の学長新崎盛暉先生が常に話をしている、キャンパスがまずそのような場所であればならないと思われました。

その頃、キャンパス内には校舎以外にプレハブの建物があり、バラバラでした。敷地内には国有地の里道も通っていて、間口は狭

いという地形。それを「地域に対して開かれた大学」として認知してもらえ、将来のビジョンを含めてキャンパスのあり方を提案しました。

当時、依頼されていたのは1号館の設計だけでしたが、私は1号館だけでなくその後の建築(2号館、3号館)も視野に入れたキャンパス計画を提案したんです。当時の教授会(建設委員会)では1号館しか頼んでいないのに、軽く叱られたかな(笑)。

いまの1号館、2号館、3号館、そして本館までつながるキャンパスの全体像を描いたプランでしたが、25年を経てすべて形にすることができました。理事会を中心にキャンパスを少しずつ広げ、充実させることに取り組んできてくれたことには感謝しなければなりません。

## 建築デザインの意図について

打ち放しのコンクリートという無彩色の世界でどのように表現するか。無機質な素材の中に湾曲や凹凸、幾何学を取り入れることで空間に変化が生まれる。仕上げのテクスチャーや庇の陰影で表情が現れる。2号館上の雲のようなかたちは、空と建物をつなぐカタチとして必要だと思いデザ

インしました。

階段の裏側に、あえて凹凸を見せているのは、視覚的に階段がここにあることを示したいから。本当は「本館」とか「1号館」とかいう文字看板はいらなないと考えますよ。大学の人はわかるし、わからなければ聞けばいいじゃないですか。迷子になって建物を楽しんでほしいと思っています。

円柱の下には溝が彫り込まれた四角い礎を設けていますが、これは昔の沖縄の住居で用いられた伝統的な柱と同じです。どっしりとした安定感を感じられると思います。

キャンパスで一番、重要な場所は中庭です。ここを囲むように建物を配置しています。日常的にもここが中心ですが、学園祭等々ときの賑わいも想定しました。学生たちがステージとして建物の一部を使い、観客がそれを楽しめる場所として広場をつくりました。

私の設計は「つくる」と「まもる」が基本。沖縄の自然を大事にする。それと建築を「つくる」ということを一緒に実現していくことが可能だと思えるようになって、すごく楽になりました。「つくる」と「まもる」を一緒にやっていくことが、沖縄で設計に携わる意義だと思っています。ヤマトのはずれの

沖縄ではなく、沖縄の沖縄、その沖縄にある大学としてキャンパスをどうデザインするか。風や太陽の動きを大切にして設計しています。学部ごとに縦割りになったような文科省型のキャンパスの設計はだめだと思いました。様々な学科や人々が混じり合い、活発に交流する場をつくりだすことが大事にしました。

## 各時代のニーズを反映した建築設計

1号館設計の頃、教職員の給料の遅配が出るなど、沖大の経営状況はひっ迫していたことを知っていました。だから、できるだけ工事費を圧縮するよう工夫したところ、予算が少し余ったんです。すると、当時の副理事長の新垣淑哲さんが、「真喜志さん、これは未来への投資です。あなたは心配しなくてよいから、準備した予算は全部使ってください」と言ってくれました。そこで、1号館の前に追加工事で半屋外の回廊や階段をつくり、彫刻家の能勢孝二郎さんの協力を得てアートを組み込んだデザインにしました。建物と彫刻を一体的に実現することができました。

2号館の設計の時は、環境についての様々な問題が顕在化した



時代でした。公害論で著名な宇井純先生が沖大に來られたタイミングでもあり、文系の大学にもかかわらず理科実験室の設置や中水利用のための合併処理浄化施設と雨水貯水槽の設置等、大学の社会的役割を考えて設計しました。大学の中心となる図書館も、資料室等にガラスブロックを設け、自然光が入るようにするなど工夫しています。

3号館は福祉文化学科の設置に伴う整備であったため、全面的にバリアフリーとした建築です。少しずつ広げていったキャンパスであるため土地の形状がいびつで、それを活かして扇形の大教室を設けるなど、敷地条件を活かした設計になっています。

建物のカタチが先にあるのではなく、敷地が求めるカタチをみつけていくことで建物ができ、空間をつくりだしていく。そういう設計をやってきました。

**キャンパスをつくる過程で大変だったことはありますか？**

楽しんでだけで苦労はありません。全部うまくいったと思います。

ひとつひとつの建物を個別に考えるのではなく、将来つながっていくことを想定してつくって

きました。だから、自然に建物どうしがつながり、雨が降っても濡れずに移動できますし、中庭を見ながら回遊できるキャンパスになっているでしょう？

新築、増築する際に設計者として選んでもらい、四半世紀という時間をかけて思い描いたキャンパス空間を実現できたことに感謝しています。そして現在、学生の皆さんが意図したとおりにキャンパスを使ってくれている様子を見て、本当に嬉しく思います。

### 沖繩大学の学生に向けてメッセージ

学生時代というのは、社会人になるための予行演習の期間だと思います。沖繩大学の地域に開かれたキャンパスを活かして行動できれば、社会にでても空間をうまく活かして使っている人間になれると思います。学生たちにはそういうふうになってほしいと願っています。

小さなキャンパスはいま、40年近い時を経て、一歩ずつ着実に大きく成長していると感じます。大学の発展を願う、当時の学長や理事関係者等多くの方の想いをカタチにと、設計くださった真喜志さん、改めて貴重なお話しありがとうございました。



### 真喜志 好一 さん

1943年、那覇市出身。

68年、神戸大学大学院修士課程を修了し、神戸大学工学部建築学科助手に。

72年11月から、沖縄開発庁沖縄総合事務局営繕課勤務。

76年4月1日、建築研究室DAP設立。

91年、**沖繩県の建築家としては初となる日本建築学会作品賞を受賞**（沖繩キリスト教短期大学キャンパス設計）。







## 沖縄県教員採用試験合格者 こども文化学科 24人現役合格!

2023年10月13日、沖縄県教員採用試験合格者の発表があり、本学は現役学生が24名、過卒学生30名(教職支援センター把握人数)が合格しました。

今年度は現役合格者数が過去最多となっただけでなく、こども文化学科4年次の本原廉さん(八重山高校出身)は1次試験(小学校)の得点が1位(803名中)の高得点で通過しています。



人文学部  
こども文化学科  
4年次  
赤嶺 翔  
(糸満高校出身)

教員採用試験を振り返って

2023年度沖縄県教員採用試験において今年も沖縄大学から多くの合格を果たすことができました。今年度は現役過去最多であり、このメンバーで過去最多の合格者を出すことが出来て本当に嬉しい気持ちで胸がいっぱいです。合格に至ったのは、こども文化学科の先生方や教職支援センターをはじめとする多くの方々の支えがあったの合格でした。本当にありがとうございました。

私達の学年は、大学に入った時からコロナの影響で全てオンラインでの講義になりました。その為、私自身、中々友達もできず、大学の講義なども初めてであった為、困り感なども多くあり幸先の良いスタートとは言えませんでした。しかし、徐々にゼミなどが対面で行えるようになってからは、みんなで仲を深める為にバレーボールやBBQの企画運営を行う方々のおかげで友達も多くでき、充実した学校生活を送ることができました。また、学年の仲間

深まりました。そこからは、みんなが授業などで話し合ったり、2年次にはインターンシップ、3年次には教職介護等体験、4年次では教育実習など学年に応じて教育に関する授業が充実しており、多くのことを深く広く、仲間と共に学ぶことができたとと思います。また、このような授業の中で、人前に立ち授業をしたり、教科指導の基礎を学んだことは教育実習や教員採用試験2次試験にも強く生きてきました。

教員採用試験は、個人戦のようでは団体戦の試験でした。試験を受験する多くの学生は、学校で試験対策の勉強を行いました。そこで、仲間達とわからない部分を教えあったり、励ましあったりすることでモチベーションを保ちながら試験対策を行うことができました。また、先生方のサポートもとても手厚く、土曜講座や資料の配布、メンタルケアなど様々なサポートがあったおかげで乗り越えられたと思います。一次試験は長期戦で最初から長く勉強することはできませんでした。その為、自分で決めた目標に向かって2時間、4時間、10時間と勉強時間を増やしていきながら合格に向かって勉強を行ってきました。また、そこでずっと張り詰めるのでなく、時には仲間とご飯を食べに行ったりお喋りをするこ

とを行なったことによって楽しみなことが続けたことだと思います。いよいよ一次試験が終わり、二次試験の対策が始まった時には、一次の結果がわからない中、不安と期待を抱きながら毎日の対策を続けました。二次試験では、一次対策とは違った難しさがありました。面接練習や場面指導などでは、相手に言葉で伝える時に、わかっている相手にも伝えることが難しかったり、言っているうちに何を伝えたいのかわからなくなったりもありました。しかし、二次試験も周りの仲間達や先生方と協力することによって少しずつはありますが、形になってきたおかげで合格にまで繋がったと思います。このようなことから、教員採用試験は個人戦に見えて団体戦でした。周りの方々がいたからこそ頑張ることができて、本当に沖縄大学がこのメンバーと教員採用試験に取り組むことができて良かったです。

私達は、4月から小学校教員として働きます。また、現役合格した24名だけでなく、こども文化14期生の一人一人がそれぞれの場所で夢に向かって今も頑張っています。そんな仲間達と卒業までは勿論、卒業後も関わりを大切にしていきたいので、残り少ない大学生活も楽しんでいきたいです。